

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：34313

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520776

研究課題名(和文)古墳時代における若狭地域の対外交渉

研究課題名(英文)The foreign relations of Wakasa district in the Kofun period

研究代表者

高橋 克壽(Takahashi, Katsuhisa)

花園大学・文学部・教授

研究者番号：50226825

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円、(間接経費) 1,050,000円

研究成果の概要(和文)：古墳時代は日本海側の諸地域が独自の対外交渉を繰り広げた時代であり、そのことは福井県若狭地方に展開する古墳の埋葬施設や副葬品にみられる北部九州や大陸からの影響から読み取れる。本研究は、本州最古の横穴式石室や金製耳飾の出土によって広く知られる福井県若狭町向山1号墳の全貌を明らかにすることを主たる目的とした。その結果、石室壁面に武器などをかけておさめる新たな副葬方法が導入されていることや船載品を含む数多くの副葬品の詳細を知りえた。また、周辺の比較可能な中規模古墳についての測量調査や発掘調査を通して、若狭地域は向山1号墳以前から東西の地域間交渉において重要な地域であることが確かめられた。

研究成果の概要(英文)：In the Kofun period of ancient Japan, many districts along the sea coast had foreign relationships with the continent and the remote areas. Wakasa district was the most typical area in the 5th and 6th to demonstrate the activities. The oldest chamber with a lateral entrance introduced at the Mukaiyama No.1 tumulus. It was excavated there more than 25 years ago. But no details are known about the tumulus and its remains. So the purpose of this study is mainly to clarify them and restore the local relationship by researching the excavation documents and findings.

In consequent, unknown setting ways of burial goods were identified and much information about iron armaments and other goods were revealed demonstrating the value of the tumulus and the district. And I measured and partially excavated at other several tumuli in Wakasa district to rebuild the political movements during the Kofun period and found how this district were important for the central government in ancient Japan.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：古墳時代 対外交渉 若狭地域 船載品

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本の古墳時代、とくに5世紀から6世紀にかけての古墳時代中後期には、対中国、対朝鮮半島との対外交渉がさかんであった。中でも、北部九州から日本海側の諸地域では、地の利から、大和政権とは距離を置いた独自の対外交渉が朝鮮半島の諸地域との間でなされていた。そのうち、もっとも重要な地域に若狭地域がある。その具体的活動にあたった人物の葬られた古墳が若狭町向山1号墳である。そこでは本州で最古段階の横穴式石室が採用され、豊富な武器武具とともに、大陸性の品々が多数副葬されていた。しかし、四半世紀前に調査された本墳については部分的な資料紹介がなされたまま全貌が明らかでなく、古墳時代の日韓交渉に関する資料が増加している今日において、その全貌公開が強く望まれるようになった。金製耳飾などの一部の資料だけが分析が進められているだけであり、基礎資料の提示がなされていないという問題があった。

(2) 一方、若狭地域に対する古墳の見直しも長い間進んでおらず、旧上中地域の広域首長墓とされる大型前方後円墳を除くと地域の古墳の動態に関する研究は久しく停滞したままであった。向山1号墳だけの解明でも若狭地域の対外交渉の実態やその移り変わりを理解することが不十分である状態にあった。

## 2. 研究の目的

(1) 5世紀の地域勢力による対外交渉がどのようなものであったかを考える上で、上掲の向山1号墳の調査内容を公開することは何よりも研究を進展させる基礎を提供することになる。したがって、その膨大な調査資料を可能な限り資料化し、公開する作業がまず必要である。それには、当然、個々の資料に関する研究の咀嚼とそれによる古墳の性格付けが必要である。

四半世紀の間に調査記録の混乱や資料の劣化が一部生じていたが、可能な限り元の情報を復元するために、あらゆる記録類を丹念に調べることが要求される。それは、たとえば、35mmフィルムによる日誌用メモ写真の焼き付けや、遺構図の仕上げ作業などにも及ぶ。

一方、日韓双方における鉄製品や石室研究の進展は目覚ましく、それらに十分供するレベルの資料化が求められる。とくに鉄製品に関しては、X線フィルムやCTスキャナーの活用により高品質な資料を提示することが目指される。これは新たな副葬品や石室研究の基礎を築くことにもつながるからである。

(2) 初期横穴式石室をもち、対外交渉や大和政権との関係によって入手した豊富な副葬品をもつ向山1号墳が、若狭地域における古墳としてどのような位置づけができるの

かは、他の古墳との比較によって明らかにするしかない。若狭地域では全長70メートル級以上の前方後円墳以外の古墳についてはほとんど学術的な情報が得られていなかったため、それらの基礎資料も充実させることを併行して進めた。それは、同時に地域政権と大和政権(中央政権)との関係を解き明かすことにつながる。当時の大和政権は地域の対外交渉力に依存した外交から、次第に政権主導の外交へと移行していったと予測されるのであり、そのため実質的に外交にあたった向山1号墳の被葬者のような中規模古墳の被葬者たちを利用した可能性がある。したがって、そうした古墳の推移の中で向山1号墳の存在をとらえてみる必要がある。

## 3. 研究の方法

(1) 研究の全期間を通じて向山1号墳の出土遺物と記録の整理を進めた。はじめに、製作の系譜の追求が求められる墳輪を研究対象に選んだ。なぜなら、その地域の伝統にない製作技術が目立つ資料だからである。その分析においては、破片からの復元と実測作業により個体資料を用意し、その特徴の抽出や製作集団の復元につながる群別作業を行った。

また、その特異性を明らかにするために、周辺の古墳の墳輪資料と比較を行った。

(2) 向山1号墳の副葬品については、これまで金製垂飾付耳飾や一部の武器・武具の概要が知られていただけであったので、本研究ではそのすべてに対して、実測図の作成や写真撮影、そしてX線写真による検討を加えた。さらに一部の品目に対しては3Dスキャナーの計測を試みた。

そのうち、鉄製品については今までまったく無視されてきた用途や全形の不明な小型の製品に至るまで細大漏らさず図化を行い、また可能な限り接合や同定を行った。

これらの遺物は多少の出土状況に関する情報の喪失を受けていたが、形のわかるものについては、ほぼ副葬時の状態を復元することができた。その結果、次の項目で述べる新たな発見がいくつも得られた。

(3) 向山1号墳以外の若狭地域の古墳については、次の二つの視点から充実を図った。一つは、これまで研究の関心を集めていた広域首長墓の集中する脇袋地区を擁する上中エリアの垣根を取り払い、西に隣接する小浜市域と北に隣接する三方エリアの古墳のデータを充実させることであった。そのため、急峻な山の上へも踏査を繰り返し、重要古墳をみつけ、測量や部分発掘によって、情報の収集に努めた。

もう一つは、向山1号墳の膝元、上中エリアでの古墳群の見直しであった。それには、長い間、3基の広域首長墓しか注意されてこなかった学史を塗り替えるために、新たな資

料の掘り起しが必要となった。そのため、存在が知られていたり、一部に報じられたりしていたその他の中規模古墳の存否の確認に始まり、測量や部分的な発掘も企図された。

さらに、3基の首長墓の築かれた脇袋地区にはかつて7基の古墳があったとされる根拠となっている古絵図を調査し、かつての古墳の分布状態を復元することとした。これは、本研究開始前年に明らかになった4基目の首長墓クラスの前方後円墳である糠塚古墳の分析が関係している。この作業によって、若狭地域の独特な首長墓景観がよみがえり、それとの関係で向山1号墳などの中規模古墳を理解することができ、当時の政権構造が浮かび上がると考えた。

#### 4. 研究成果

(1) 向山1号墳の埴輪については、資料化できたすべての普通円筒埴輪、朝顔形円筒埴輪が画一的な2条突帯3段構成の胴部の規格をもち、その形態や底部の調整技法などにおいて、東海地方の製品との類似を見せるものであることが確認された。東海地方の中でも尾張地域に限定できるが、いまだその地域でも独自の埴輪生産が確立する前の段階に相当すると結論づけられた。

また、その様相がきわめて特異であることは、これまで似ているとされてきた脇袋地区にある脇袋丸山塚古墳の埴輪がそうではなく、対照的に畿内的であることによってさらに補強された。

形象埴輪についても台状施設の周辺を中心に須恵器とともに数種類が確認された。一方、墳丘からは蓋形埴輪が樹立されていたことが明らかになった。

(2) 副葬品についてはその埋納方法と製品そのものについてそれぞれ新たな事実が判明した。

石室での埋納方法では、石室各所からみつかった鉤状鉄製品と矛の出土位置から、壁面にフックをかけそこに矛を掛けるように埋納されていたことが復元できた。これは、朝鮮半島中部の同時期の横穴式石室(新鳳洞2号墳)に確認でき、やはり半島から伝わった副葬方式であることがわかった。ただし、それ以外にも不明な鉄器があり、木棺に関連する未知の製品があったようだ。

また、石室奥壁から出土した鉄鏃の観察から簾様の材質の矢筒に入れた状態で副葬した矢の束もあったことが判明した。同種の副葬方法も朝鮮半島南部の加耶地域で類例がみついている(礼安里43号墳)。こうした事例は石室や舶載品自身だけでなく、葬儀の内容自体も伝えられたことを示すものである。

このほか、盾隅金具を四隅に取り付け新式の盾が遺骸の脇に副葬してあったこと、刀と剣は木製の鞘に納めた状態で副葬されていたのに対して、矛は木製の鞘を伴わないこ

となど、鉄さびに残された痕跡の観察から幾多の事実が明らかになった。

製品の詳細については、3Dスキャナーの活用をはかり、従来の実測に比べてより正確な図面の作成と観察が可能となった。これにより、3領の短甲の内面の様子や、金製耳飾の細工のあり様や大きさなどの細かな情報が得られた。なお、2面の鏡に関しては、X線写真がもっとも鋭敏に文様痕跡をとらえていることがわかった。

向山1号墳を特徴づける豊富な刀剣槍類に関しては、装具の痕跡の観察によってそれぞれ複数の型式が存在していることが判明した。それぞれの員数についても大幅に修正できた。短甲についても新たな鋳の使用も確認できた。

そのほか、先に述べた矛を掛けるための鉤状鉄製品やそれに類する鉄製品、そして馬具ではないかとみられる鉄製品などがあることがあらためてわかった。鉤状鉄製品に類する出土品は調べてみると中期から後期古墳に少なからず存在し、これまでその性格が不明であったものである、ここで得た情報は、今後の副葬品研究に新たな展開をもたらすことは間違いない。

ガラス製と石製の玉類についても科学分析を踏まえた種類分けと定量的分析をおこない、一部伝世とみられるガラス玉が存在することがわかった。

さらに、床面の赤色顔料にベンガラと朱の双方があることを蛍光X線分析により明らかにした。

(3) 須恵器だけでなく、上記の副葬品の組み合わせからも向山1号墳の築造年代は5世紀中ごろと推定することができる。副葬品の状況を中心に判断するならば、追葬や盗掘はなされていなかったと判断できる。

(4) 本研究ではじめて詳細が明らかになった向山1号墳以外の若狭地域の中規模古墳についても大幅に情報を増やすことができた。

まず、若狭で最初の中規模前方後円墳が実は小浜市域で築かれたことがわかった。それが海からも仰ぐことのできる山頂に築かれた九花峰古墳である。本墳についてはかつて小浜市史作成時になされた測量図があったが、現況と前方部の形状に明らかな差異が認められるため、測り直しが求められた。

その成果を見る限り明らかに前方部が細くて低い特徴を有し、当地の土器製塩の開始時期と重なる4世紀後半に遡ると判断された。若狭の古墳時代の開始に関する重要な知見であり、当初から海との関係が強かったことが確認できた。

続く5世紀前半にはこれまで研究の手薄だった三方エリアに円墳の藤井岡古墳と藤井岡三昧古墳が埴輪をもって登場することがわかった。これは、5世紀に首長墓が集中

する脇袋地区がやや内陸に奥まっていた理由がこれまで畿内と西方との交通上の関係からのみ説明されてきたことに再考を促すものである。すなわち、三方エリアは気山津という東方との交通上の要衝を有しており、脇袋地区が西方の交易拠点としての小浜市域と東方との交易拠点の三方エリアをともに結びつける位置にあることが理解され、それが首長墓がそこに連続的に作られる要因となったのである。

いっぽう、向山1号墳に前後する時期に脇袋地区の丘陵上に帆立貝式古墳の脇袋丸山塚古墳が登場することもわかった。このことは、向山1号墳の特質を知るうえで大きな成果であった。帆立貝式古墳はこの時期、大和政権の直隸的な性格を考えさせる墳形であり、向山1号墳の独自性と強い対照を見せる。しかし、いっぽうでその前方部には粘土の被覆された特殊遺構が存在し、向山1号墳の武器埋納坑に対比しうる施設をもっているのかもしれない。これについては慎重を期して上面での検出にとどめた。この古墳に関する詳細を知ること、向山1号墳の対外交渉や軍事的色彩の個性を測るうえで欠かせないことと判断される。

さらにその後の脇袋地区の動向としては、上ノ塚、西塚、中塚の3大首長墓に続いて、それらに準ずる規模の前方後円墳である糠塚古墳が築かれていたことが発掘によってはじめて判明した。加えてもうひとつの未発見の前方後円墳、光塚古墳の存在が絵図から明らかになった。両者は主軸をそろえていることから、近接する時期の築造とみられる。

さて、これら2基の古墳が築かれた5世紀末から6世紀初頭に小浜湾を見下ろす丘陵上に丸山城跡古墳が埴輪をもって出現することも明らかにできた。このことは、脇袋地区と小浜市域の古墳の関連性を強く示すものであり、この時期に若狭がもっとも飛躍を遂げることがわかった。5世紀から6世紀にかけて一貫して前方後円墳を造営し続けた地域はきわめてまれであり、その背景に対外交渉における若狭地域の重要性があったことは間違いない。いっぽうで、東方との結びつきの強さも大和政権にとって大きな意味をもっていたに違いない。

その地域勢力を大和政権がどのように取り込もうとしたかについては、帆立貝式古墳の脇袋丸山塚古墳の出現の意味を考えると今後重要になってくるであろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 1件)

高橋 克壽、花園大学考古学研究室による若狭地域の古墳調査、花園史学会、2012年 11

月24日、花園大学無聖館ホール

〔図書〕(計 2件)

高橋 克壽、同成社、若狭における横穴式石室の受容と展開 - 閉塞構造と追葬を中心に -、技術と交流の考古学、2013年、548~557ページ

高橋 克壽、播磨の大型古墳と畿内政権、大型古墳から見た播磨、2012年、43~53ページ

〔産業財産権〕

出願状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等  
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 克壽 (TAKAHASHI, Katsuhisa)

花園大学・文学部・教授

研究者番号：50226825

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし